

教授就任にあたって



教授就任にあたって

大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻 齊 藤 力
顎顔面再建学講座 組織再建口腔外科学分野

新潟大学歯学部口腔外科は昭和42年に故常葉信雄教授が就任されて以来、中島民雄前教授、大橋靖前教授、染矢源治教授、高木律男教授ならびに諸先生方のご努力により今日の隆盛が築かれて参りましたが、平成13年11月1日付けで大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野(旧口腔外科学第一講座)を担当することになりました。

私は昭和47年に東京歯科大学を卒業し、同年に同大学大学院歯学研究科(口腔外科学専攻)に入学し、当時主任教授でありました高橋庄二郎先生のご指導のもと「下顎骨切除患者の顎運動機能に関する研究」を行いました。下顎骨に発生した腫瘍ないし腫瘍性病変患者に対する下顎骨切除方法、切除部位、再建方法の違いなどが術後の顎運動機能に及ぼす影響を手造りの磁場を応用した三次元顎運動分析装置や筋電計などを用いて解析を行い、顎運動機能温存の面からみた下顎骨切除方法、ならびに再建法について検討したものです。当時、東京歯科大学の口腔外科では教授の方針で大学院生も有給助手と全く同様に診療と学生教育を行うことが義務づけられておりましたので、朝から夕方まで外来診療を行い、病棟勤務期間は患者管理をしながら、研究は深夜に行うという毎日でした。そのおかげか大学院修了の頃には簡単な顎外科の手術執刀を行うことが出来るようになりました。大学院生にとってはきつい制度でしたが、今ではその頃の経験が役立っていると思います。昭和51年に大学院歯学研究科を修了後、同大学口

腔外科学第二講座助手に採用されて以来、診療、研究、教育に従事して参りました。主な臨床、研究は顎顔面再建後の機能評価、顎顔面変形症に関する研究、口唇口蓋裂に関する研究、歯科インプラントの顎顔面領域再建への応用などであります。今後はさらに顎顔面口腔領域の組織再生・再建、ならびに咀嚼機能改善のための外科などの分野に関する臨床と研究を推進したいと思っております。

近い将来に実施が予定されている国立大学の独立行政法人化を控え、文部科学省の予算重点配分、全国の国立大学で検討されつつある歯学部附属病院と医学部附属病院の統合問題などにわかに意識改革と機構改革が迫られてきました。とくに口腔外科・歯科麻酔科も必然的にこの動きに対応していかなければならないと考えております。当然のことながら、さらなる質の良い診療、効率の良い診療、増収などが求められます。そこで従来から新潟大学が行っております開業歯科医との有機的な病診連携・歯科医療情報の発信と交換、関連病院や近隣の病院との有機的連携などを一層積極的に推進していきたいと考えております。

各分野の諸先生方と協力して、新潟大学のなお一層の発展のために微力ではありますが一生懸命努力いたす所存でございますので、何卒よろしくご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



教授就任にあたって

顎顔面再建学講座硬組織形態学分野 大島 勇 人

平成14年1月1日付けで小澤英浩教授の後任として顎顔面再建学講座硬組織形態学分野（旧口腔解剖学第一講座）を担当させて頂くことになりました。新潟大学歯学部に入學したのは昭和56年（1981年）ですが、約20年前に小澤教授から教えて頂いた口腔組織発生学の講義が思い出されます。その当時の講義ノートは大切に保管し現在の講義にも活用しておりますが、その当時を思い起こすと、小澤教授は学生から見てもアクティブで研究者としての魅力を感じさせる先生であったと思います。その小澤先生は昭和48年（1973年）に口腔解剖学第二講座（2解剖）の助教授から口腔解剖学第一講座（1解剖）の教授になられたのですが、小澤教授門下生の高野吉郎先生（現東京医科歯科大学大学院教授）が小林茂夫先生の後任として2解剖の教授に、そしてこの度また私が2解剖助教授から1解剖の教授になり、何か不思議な縁を感じます。

さて、これまでの私の研究の変遷、今後の抱負について述べたいと思います。2解剖での大学院生時代には、故小林茂夫名誉教授、吉田重光助教授（現北海道大学大学院教授）のご指導のもと、口腔組織の微小循環を明らかにすると共に、歯牙形成期ならびに病態下の象牙質形成における象牙芽細胞と歯髓毛細血管の連関を研究の主要テーマとし、ラット臼歯窩洞形成後の修復象牙質形成に関する研究を学位論文としてまとめました。この研究は現在に至るまでの私の研究の基盤となっています。

大学院修了後は、新潟市内の長谷川歯科（院長は2期生長谷川裕亮先生）にて1年8ヶ月間臨床の研鑽を積み、臨床が基礎か自分の進むべき道の決断を迫られた頃、小林教授の後任として教授になられた高野先生から再び大学で教育・研究をす

ることを勧められて大学へ戻ることを決意したのが、平成4年（1992年）12月でした。高野教授のもとでは、初期免疫応答に重要な働きをする抗原提示細胞に着目し、歯牙形成期および病態下の象牙質形成における当該細胞の動態を検索しました。同分野でアクティブに研究されている興地先生が昨年本学の総合診療部教授になられたのは、心強い限りです。

その後平成9年（1997年）には、高野教授が東京医科歯科大学に移られたのに伴い2解剖助教授から教授に昇任された前田健康先生のご高配により、文部省在外研究員としてヘルシンキ大学 Irma Thesleff 教授のもとに10ヶ月間派遣され、共同研究を行う機会を与えられました。Thesleff 教授の研究室では、人類学、形態学、生化学、分子生物学、細胞生物学というジャンルを越えた学際的プロジェクト研究を実施しており、その中の一スタッフとして歯の発生学の研究に参加致しました。これからの研究の進むべき方向は個人単位の研究より、様々な分野の研究者による学際的共同プロジェクト研究の推進の必要性を痛感しました。帰国後、新潟大学医学部附属病院里方一郎講師（現新潟大学大学院医歯学総合研究科教授）との共同研究により、ホメオボックス遺伝子 *Msx* 2欠損マウスの歯の形態異常に関する研究を行いました。

前田教授のもとでは、ストレスによる損傷からの防御と修復に関与することが知られている低分子熱ショック蛋白 heat shock protein (Hsp) 25に着目し、エナメル質ならびに象牙質形成における Hsp 25の役割、窩洞形成、歯牙再植後の修復象牙質形成や骨様組織形成における Hsp 25の役割について検索し、現在その仕事を発展させています。

歯の発生学の分野も含めて最近の研究の主体は分子生物学、細胞生物学になり、生物科学の基本である形態学の占める割合が低下してきたかの印象を受けます。しかしながら、“true is beauty”の言葉から分かります様に、形態学の重要性は現在に至るまで不変であり、研究基盤としての形態学について十分アピールしていきたい

と思います。また、広い視野で臨床講座および他の基礎講座との共同研究を推進すると共に、自分のコアの研究テーマである Tooth Development と Pulp Biology の研究を発展させると共に、学外との共同研究も積極的に推進していきたいと考えています。

